

提言第11号 肝生検に係る死亡事例の分析

事例3

< 事例概要 >

- ・ 80 歳代の患者、PS ※13。死亡時画像診断（Ai） 有、解剖有。
- ・ 主診療科：呼吸器内科、肝生検施行診療科：消化器内科。
- ・ 抗凝固薬内服中。肝生検 2 日前から休薬した。
- ・ 血小板 23.3 万/ μ L、PT 時間 13.5 秒、PT 活性66.7%。
- ・ 悪性リンパ腫疑いのため、腹部超音波ガイド下で肝生検が実施された。
- ・ 肝生検終了から約 30 分後、腹痛を訴え鎮痛薬が点滴投与された。約 1 時間後に嘔吐、約 1 時間半後に嘔吐、血圧低下、経皮的動脈血酸素飽和度（SpO₂）が測定不可となった。腹部超音波で、肝表面に血腫が疑われて輸血された。約 3 時間後に心肺停止となり、動脈塞栓術が施行されたが、約 8 時間後に死亡した。
- ・ 生検組織診断の結果は、びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫であった。

※1 PS（performance status）： ECOG（Eastern Cooperative Oncology Group）が定めた全身状態の指標で、患者の日常生活の制限の程度を示す